

祖父の思い

行田市立長野中学校 三年
根 岸 勇 気

僕には忘れられない食べ物がある。それは、おむすびだ。おむすびといえは、今ではコンビニでさまざまな具が入った物が売られているが、僕の忘れられないおむすびは、形がちよつといびつで具は入っていない塩おむすびのことだ。そしてこのおむすびを作ってくれたのが、今は亡き僕の祖父である。

僕の祖父は、大正生まれで食堂を営んでいた。手先が器用だった祖父は、僕達兄弟に色々なおもちゃを作ってくれたり、時間があればいつも一緒に遊んでくれた。そして遊んでいてお腹がすいてくると、祖父が塩おむすびを作って持ってきてくれたのだ。食堂をやっていたぐらだから料理が得意なはずなのに、なぜかいつも塩おむすびだった。その頃僕はまだ幼かったので、当たり前のように祖父が作ってくれた塩おむすびを食べていたが、祖父が亡くなってから祖母に、

「じいちゃんをよく、塩おむすびを作ってくれたよね。」

と話したことがあった。すると祖母は、

「じいちゃんにとってお米は、忘れられない大切なものなんだよ。それに、お米が体に一番いいことも知っていたからね。」

と教えてくれて、祖父のことを話してくれた。

祖父が生まれ育った頃、日本は戦争中で食べる物もなく、一日一日を生きることと精一杯だったそうだが、物があふれていて、食べる事に困らない時代に生きている僕にとって信じられないことだが、過去の日本にもそんな時代があったのだ。その時代を経験してきた祖父だから、お米の大切さが身にしみて分かっていたのかと勝手に僕は思っていたが、それ以上に祖父にとってお米の大切さを感じた出来事があった。それが出兵の後にシベリア抑留された時だった。シベリアとは今でいう、ロシア連邦のことだ。地理の授業で、寒さがとても厳しい地域ということを学んだ。そのような慣れない場所で祖父は、四年間捕虜として過ごしていたようだ。捕虜としての仕事はほとんどが強制労働で、とてもきつい仕事だったと、祖母は聞いていた。それだけ働かされた後での食事は、ほとんどパンだったという。体の大きかった祖父にしてみれば、食べ慣れていないパンを食べても力が出せるはずもなく、いつも空腹になりながら、仕事をしてきたにちがいないと僕は思った。そんな祖父が、日本に帰って来て、一番最初に食べた物が、白い米だった。まだ戦後間もない頃だったので、白米はとても貴重な物だったが、お腹いっぱい食べさせてもらったと、祖父は話していたようだ。

祖父が作るおむすびには、戦前、戦後を生きぬいてきた祖父のさまざまな思いが込められていたのだろう。そして、おむすびを喜んで食べる僕達の姿をみて、今という時代を幸せに感じていたのかもしれない。

僕は中学生になりソフトテニス部に入ったが、休日の練習でお弁当が必要な時は、必ずおむすびを持っていく。おむすびを食べると、力が出て思い切りプレーが出きる気がするからだ。

これからの生活の中で米は、僕にとって大切な食べ物だ。成長するために欠かせない物だということはもちろんだが、なんといってもお米には、祖父の思いがいっぱいつまっているからだ。